

地域子育て支援拠点研修事業〈東京開催〉

〈開催概要〉

- 開催日 平成 25 年 10 月 20 日（日） 10:00～16:30
- 会場 東京ウィメンズプラザ
- 主催 一般財団法人こども未来財団
NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省、(社福) 全国社会福祉協議会、東京都、子育て応援とうきょう会議、
(社福) 東京都社会福祉協議会
- 協力 NPO 法人すぎなみ子育てひろば chouchou
- 参加者数 188 名（女性 182 名、男性 6 名）
(行政 22 名、NPO/任意団体 128 名、その他団体/企業 35 名、その他 3 名)

〈プログラム〉

■主催者挨拶

安藤哲男さん 一般財団法人こども未来財団 常務理事



■プログラム 1 基調報告

「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

竹林悟史さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長

地域子育て支援拠点事業の開始から 5 年が経過し、実施形態の多様化や地域の「利用者支援」が法定化された状況を踏まえ、平成 25 年度より機能別に「ひろば型」及び「センター型」を統合して「一般型」に再編、職員配置や活動に応じた支援体系に変わりました。「児童館型」は「連携型」として、実施対象施設を見直し着実な事業推進を図ります。また、機能強化を目的にした「利用者支援」・「地域支援」を行う「地域機能強化型」を創設しました。

子ども・子育て関連 3 法の趣旨が、「自公民 3 党合意の上で成立」（与野党問わず）というところが大きな意味と考えます。主なポイントは、幼児期の学校教育・保育、地域の子ども・子育て支援に共通の仕組みを持たせること。実施主体は市町村、財源は消費税率の引き上げを前提に確保し社会全体で費用を負担する。推進体制は内閣府に本部を置き、その政策プロセスに参画・関与することができる仕組みとして「子ども・子育て会議」を設置し、その委員及び専門委員が定期的に議論を重ねていくこととします。（現在月 2 回ペースで実施されている）

地域子育て支援拠点は「すべての子ども・子育て家庭を対象にした重要な事業」と定め、市町村がニーズを把握し、一つ一つの家庭にあった支援を考え、しっかりと市町村の子ども・子育て支援事業計画に位置付けて、消費税財源により計画的に拡充を図っていくことが重要です。



■プログラム2 パネルディスカッション

「子ども・子育て支援新制度のもとで拠点はどう変わっていくのか

～利用者支援・地域支援について考える」

【パネリスト】橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授

鈴木晶子さん 一般財団法人インクルージョンネットよこはま 理事

竹林悟史さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長

【コーディネーター】奥山千鶴子さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長

橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授

「子育て支援コーディネーターの役割と期待される力量について」

子育て支援コーディネーターの役割を確実に実施していくためには、その機能と業務の明確化が必要であることや、昨年度の調査研究から拠点事業の中におけるコーディネーターとしての役割と力量がわかりやすく説明された。

子育て支援コーディネーターには、日常的に他領域やインフォーマルな資源を含めた地域の資源とつながり、その関係を基盤としながら、継続的、横断的に資源と家族をつなげ支えていくことが求められることなどが話された。



鈴木晶子さん 一般社団法人インクルージョンネットよこはま 理事

「パーソナル・サポート・サービスのコーディネート」

パーソナル・サポート・サービスとは、さまざまな困難に直面し、社会から排除されている方を寄り添い型で支援し、社会に包摂していくことを目指す事業である。インクルージョンネットよこはまでは、主に若者（15歳から39歳）を支援の対象としている。また、パーソナル・サポート・サービスのコーディネートは、当事者主体で、オーダーメイドで、支援ネットワークを考えて行くことが重要であり、その内容として、すでに繋がっているリソースとの関係の改善、強化、まだ繋がっていない必要なリソースと繋ぐこと、そして、必要だが、地域にないリソースは作っていくことがあげられる。



ここでは事例を通して、パーソナル・サポートという発想およびその視点について話された。

[パネルディスカッション]

橋本先生

コーディネーターの役割についての再確認ができた。包括的支援を実践するためには、問題の捉え方を家族の中からも確認し、必要なリソースとつなげていき、また無いリソースは地域開発という観点から小さいことでも作っていく必要がある。

鈴木さん

乳幼児家庭の支援については、乳幼児の問題に限らず、世帯全体を把握し、全体の問題を解決していくネットワークが必要である。また、子どもの成長の次の段階の支援者にリレーしていくことが、将来の子どもの自立につながっていく。子どもの成長に沿って、課題解決の見通しを持った支援が必要である。



竹林室長

子育て支援の制度がようやく確立してきた。実践者の方々には、適宜工夫しながら制度を活用し、更なる子育て支援の充実を図ってほしい。

奥山さん

子育て支援コーディネーター事業を重荷に感じるかもしれないが、地域の中にネットワークを得て、支援を次のステップにつなげていける事業を構築していけるチャンスだと捉えたい。

■プログラム3 分科会

<第一分科会> 「求められる地域機能強化とは」

- 【講師】 岩間伸之さん 大阪市立大学大学院生活科学研究科 教授
【話題提供者】 野口比呂美さん NPO 法人やまがた育児サークルランド 代表
【コーディネーター】 奥山千鶴子さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長

岩間伸之さん 大阪市立大学大学院生活科学研究科 教授

「地域を基盤としたソーシャルワークの展開 ―個と地域の一体的支援―」

新たな制度が動きだそうとしている今、制度化によって今までより専門性が求められ、子育ての領域だけではなく他の領域と一緒に地域で支えていかなくてはならない。今までのやり方では足りず、子育てに関係するあらゆるニーズに対応し、うけとめていくという覚悟が必要である。

地域を基盤としたソーシャルワークを子育ての領域で考えてみると、地域子育て支援拠点事業における利用者支援・地域支援で求められる視点として以下の5つがあげられる。

1. 多様な子ども及び保護者と向き合う。
それぞれの人や事情にあわせた支援を継続的に行う。
2. 子どもと保護者を地域のネットワークで支える。
地域の様々な関係者と連携が必要になってくる。単なる橋渡しだけではなく解決までもっていく。
3. 子育て支援から「生活支援」へ展開する。
子育て支援が入口であっても実際は生活全体の支援になる。
4. 早期発見・早期対応による予防的アプローチを重視する。
福祉の分野では今まで事後対応の傾向が強かったが、ひろば事業はまさに予防的。今後は早期対応の機能を加える。
5. 親子システム（家族）の変化を支え続ける。
今の状態を維持していくのではなく、より健全に変化していくのを支え続けるということ。



野口比呂美さん NPO 法人やまがた育児サークルランド 代表

地域で自主的に活動する育児サークルの横のつながりを持ちたいと発足し、子育て支援施設「子育てランドあ〜べ」を運営している。東日本大震災後の避難家庭の支援で福島と山形がつながる場所との願いを込めた「福山ひろば」を開館。

課題を抱えている家庭の見極めとその家庭への直接支援や地域の中での解決をはかった事例の紹介。



奥山千鶴子さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長

地域機能強化は、今までのやり方では難しいところもある。支援する側をどう変えていくか、進めていく基盤についてなど自治体と相談しなければならないこともある。現実的に時代の要請はあり、現場でやっていかなければいけないということを、日々目の前の子育て家庭を見ていると感じているのではないか。

すべてのひろば、支援センターが、機能強化型にならなくてはならない、ということではなく、それぞれの力量に合わせ、先に進めてもよいという類型ができたということ。私たちの目指す方向の確認が、岩間先生から明確に出された。それに向かって私たち自身が一步前に踏み出すかどうかを決めていく、ということではないか。

【質疑応答】

◆「個人情報をごどのようにしているか。」

岩間先生 個別支援、地域支援につなげるためには個人の情報を守る段階からもう一つ上に上がり、情報を共有するための工夫が必要になっているのではないだろうか。自治体によってはルール作りがなされているところもある。



◆「他の分野の人との連携で注意する点はどんなことか。」

岩間先生 「事例始まり」で考えることが大切。事例のないところから連携はできない。

◆「親が気にしていない虐待のケースなどをどうしたらいいか。」

岩間先生 関係施設に連絡をとるだけでなく、たとえ親が気にしていなくても普段の生活の様子などをよく聴き、きちんと向き合うことが大切。今後必要なのは専門化へのプロセスではなく、多様化へのプロセスであるべきで、それは一朝一夕では力はつかない。しかし、一步だけでも前に進むことで次の課題が見えてくる。今までのやり方では難しい、時代の要請でもあるが、目指す方向の確認をした上でそれに向かい一步踏み出すかどうかを自分たちで決めていく時である。

<第2分科会> 「親子に寄り添う地域子育て支援拠点であるために

～利用者理解、受容、共感、相談について考える」

【講師】

新澤拓治さん 社会福祉法人雲柱社 施設長

坂本純子さん NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事

[地域子育て支援拠点事業のガイドラインについて]

坂本純子さん NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事

「はじめに、①地域子育て支援拠点とは、②基本的な考え方」

節目、節目に、拠点事業とは、どういう役割を与えられて、存在しているのか。親子を支えるとは、どういうことなのか、改めて整理していくことが大切であること。初心者には、活動のよりどころとして、経験を積んだ方には、原点に立ち返るということ。ガイドラインを意識してほしい。また、ガイドラインが誕生した背景や、地域子育て支援拠点とは親子・家庭・地域社会が交わる場所であるということについて話された。



新澤拓治さん 社会福祉法人雲柱社 施設長

「③支援者の役割、④子どもの遊びと環境づくり、⑤親との関係性、⑥受容と自己決定」

ガイドラインの中で、キーワードは『交流』である。拠点事業は極めてシンプルな事業であり、現場の仕事から生まれた事業ということは貴重である。自分達は、何をやってきたのか、どういうひろばにしたいのか、自分達で考えることが大切である。それによって役割がみえてくる。投げられた玉をいったん、相手の型に納め、いろいろなキャッチボールをし、多様な道に進んでいく手伝いをするのがプロの仕事である。事例を出しながら、支援者の役割、利用者理解には相互理解が必要ということや、子どもへの関わり、受容、共感、相談についての話があった。

坂本さん

「⑦守秘義務、⑧運営管理と活動の改善、⑨職員同士の連帯と研修の機会」

守秘義務、安全等に関しては、定期的に確認することが必要。ずっとやっていると慣れがでてきてしまう。利用者から指摘された場合には、謙虚に受け止めすぐに対策をとるようにしたほうがよい。定期的な外部の研修は必要。どういう方向に向かっているのか、最近の動向を考えていくことが大切である。研修内容を、内部でシェアし、フィードバックすることも大切。

[事例を使ったワーク]

事例をもとに、各グループでどのような親子なのだろうか？ひろばでできることは何か？の2つの項目について話し合い、発表した。

ひろばでの様子からみた母親像や子ども像、スタッフ側の受け入れる際の問題点等が発表された。各グループとも表面的な判断だけでなく、深く母親と子どもを知ろうとしている姿勢がうかがえた。



ひろばでできる事については具体的な内容が次々と発表された。同じ事例をみてもいろいろな見方や感想があることを共有した。

[まとめ]

新澤先生

否定的な言葉をぶつけるのではなく、とにかく温かく迎え入れる。この人は困っているのだろうか、まず考えることも大切。本人は必要としてない場合もある。利用者との関係性があれば、日常の様子がよく理解できるので、外部からの情報はなくてはいけませんが、ひろばの中で起きている情報の中で判断することもある。そのためにも、一面だけでなく、いろいろな見方・対応をする必要がある。スタッフ同士よく話をするのが大切。地域・社会の資源である利用者をスタッフがそれぞれの力を持って対応していけたらよい。

坂本さん

魔法の解決策はなく、それぞれのケースで少しずつ状況が違ってくる。長くやっていると、パターン化する傾向にあるが、パターンにのせた解決は、落とし穴があったりする。こういうお母さんだというパターン化せず、そのケースによって、まったく違うものとして、ゼロから考えることが大切。スタッフ間で、常にたくさんものを出し合って共有し、利用者へ寄り添っていくことを心がけると、いずれは、利用者支援コーディネーターとして踏み出していける。

<第3分科会> 「地域子育て支援拠点における『子育て支援コーディネーター』について」
行政や他機関との連携・そして広がる拠点の輪」

- 【講師】 橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授
【事例報告】 石田尚美さん NPO 法人松戸子育てさぼーとハーモニー 理事長
原美紀さん 港北区地域子育て支援拠点どろっぷ 施設長
【司会】 松田妙子さん NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事

松田妙子さん NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事

子育て支援コーディネーターについて国の制度がどうなっていくのかも気になるが、私たちが実践してきていることを、地域ではこういう状況だと示していきたい。地域で先行的にやってきたことが具体的にどのように展開されていくのか、共有して一緒に考えていきたい。



【事例報告1】 石田尚美さん NPO 法人松戸子育てさぼーとハーモニー 理事長

松戸市の地域子育て支援拠点事業の現状と特徴について報告。

子育てコーディネーターの役割は、子育てに関する相談を受け、地域における多様な子育て支援サービスを紹介することで、専門機関へつないでいく。そのために、積極的に地域の各機関に出向き、顔の見える関係作りを大切にしている。ひろばの中で受ける相談は様々で、その家庭にどういった支援がいいか一緒に考え、専門職、行政、利用者ができることをコーディネートしていく。



子育てコーディネーターが地域子育て支援拠点に設置されたメリットは、身近な存在で安心感があり相談しやすいことがあげられる。市内全域に配置され、自分のひろばとして利用し気軽に行くことができる。ひろばのスタッフとしては難しい面があったが、コーディネーターという専門職として位置づけられ、行政、地域に信頼してもらえ、連携がとりやすくなったことはよかった。ひろばスタッフ2人とコーディネーターがじっくり話を聞けることで、ひろばは相談の入口となり、地域で生きていく子育て家族を包括的、予防的にコーディネートしていくことができるようになった。

コーディネーターは、ひろばの機能・役割を理解して覚悟を決めてやらなければいけない。更なるスキルアップ、地域資源との連携が大切で、子育てコーディネーター間の情報交換も必要となる。

今後の課題としては、個人情報をスタッフ間でどこまで共有するか、ひろばに来られなくなったお母さんをどうするかなどがあげられる。

橋本先生

当事者の方々と地域資源をつなげていくために地域の方々との関係作りはどうやっているのか？

石田さん

とても難しいことのひとつ。例えば地域のお祭りに一緒に参加して交流を図ったりしている。行政機関とは顔を合わせて話をし、信頼関係を積み重ねていくことが大切になる。まだまだつながっていない地域資源もある。

橋本先生

地域の方々と向き合って、一人一人と顔を合わせて話していくことから関係を作っていくことが大切。

〔事例報告2〕原美紀さん 港北区地域子育て支援拠点どろっぷ 施設長

港北区地域子育て支援拠点どろっぷは設立8年目になる。現在横浜市には18区に1か所ずつ拠点がある。港北区の現状は、転出入が多いため、子どもが生まれてから初めて地域を意識する人が多い。出生数は多いが自分の育った場所で子育てしている人が少ない、夫の帰宅も遅く子育ての協力者が少ないなどの特徴がある。また児童館がないため、幼稚園、保育園に入るまでの親子の浮遊感がある。

横浜市の拠点ではそんな親子を支えていくために、求められる6つの柱がある。拠点に求められている6つの柱（契約上の要綱）



1. 乳幼児の遊びと育ちの場及びその養育者の交流の場の提供（交流ひろば）
2. 子育てに関する相談及び関係機関との連携に関すること（個別・グループ相談）
3. 子育てに関する情報の収集及び提供に関すること（情報発信・提供）
4. 子育てに関する支援活動を行う者同士の連携に関すること（ネットワーク）
5. 子育てに関する支援活動を行う者の育成、支援に関すること（人事育成）
6. 地域の住民同士で子どもを預け、預かる支え合いの促進に関すること（送迎・預かり）

港北区は都市型であるため、相談内容も複雑でサポートも難しいことが多い。6つの引き出しを駆使し、活用しながらサポートをするうち、自ずと子育て支援コーディネーター的関わりになっていく。ひろばだからこそできる予防型支援を行い、既成概念にとらわれず、利用者の主体性を尊重し、地域へつないでいく支援を心がけている。

事例として、乳児期から学童期入口まで切れ目ないサポートをする3事例（個人情報に配慮し発表用に改編されたもの）や、多胎児家庭を地域の人たちと共に見守りながらサポートした事例などを紹介した。

〔講義〕橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授

地域子育て支援拠点における「子育て支援コーディネーター役割と期待される力量」について

子育て支援コーディネーターは拠点事業の延長上にあり、公共性・公平性がなくては安定的、継続的に親子をサポートしていくことはできない。親子の生活の中に根付き、親子のニーズを見極めて必要とされる資源につなげ、資源が地域になれば開発していく。家庭を包括的に捉え、世帯全体が抱える課題を把握し、専門職へとつないでいく。私たちが客観的に捉える状況と家族が認識している状況の重なっているところを手掛かりと一緒に課題に取り組んでいく。子どもの育ちを見通し乳幼児のみのサポートではなく、成長にあわせて関係機関と連携して見守りつづけていく。広域でのコーディネーター同志の連携、交流を市町村が支えることが大切だと提案していきたい。



コーディネーターは立体的にものを捉え、次の資源へつなげていき、安全基地としての役割を果たしながら関係の広がりを支える。生活の場にいるからこそ潜在するニーズに気づくことがある。行政や他の機関と共同で地域資源を作っていく。利用支援の入口から意識してその奥のニーズを見過ごさない、見落とさないことが重要である。

コーディネーターができること、専門職ができることを見極め、コーディネーターとして何をすべきか、その役割を担っていく。自分の今の力量を見極める必要はある。大事なことは、利用者が主体である姿勢を貫ける力、どう貫くか先駆的な事例から学ばせていただきたい。拠点事業はいらないわと思ってもらえるような地域になることが望ましい。ひろばは囲い込みではない。親子が色々な地域の資源につながっていく足がかりとなるひろばでありたいと確認しながら一緒に実践を積み重ねていきたい。

[質疑応答]

◆「地域資源をつなぐ特徴的なことがあれば教えて欲しい。」

原さん 民生委員さんとつながることが多い。高齢者に子育て世代を呼び込む、サロンの充実のために公立の保育園の先生と課題解決を相談している。地域包括センター(区内8か所)へ資源を創りに行く。地区社協へ挨拶。外遊び(公園)は土木事務所、公園愛護組織とサークルの人たちをつなぐ。何のために地域に出ていくのかを考える。スタッフがお祭りに参加するのは「いつか地域に出ていく私たちの大事な利用者をよろしくお願いします。」という意味合いもある。

◆「スーパーバイズの存在、必要性は？」

橋本先生 絶対必要。石田さん原さんが最先端の人たちだと思う。拠点事業の時と同じように他の専門職から教えてもらいながら修正してやっていく。実践が先行している皆さん同志で情報交換していくことが大切で勉強になる。そのためのネットワークを作っていく。

◆「どんな人でもできるのか？」

石田さん ここにいる方と一緒にコーディネーターとはどういうものか情報交換しながら出来るかなと実感した。

原さん 地を這う、腹をくくる、無いものは創る、の3つのキーワードで地域支援をする。前後を丁寧に準備ができたか? 思いを寄せられたか? を考える。キャパが広がることを楽しめるか? 価値を見出し、意義があることと感じられるか? 肯定的な見方、捉えでいられる体力があるかといったことが求められる。

橋本先生 どんな人でもできるものではないと思う。理由はそれぞれの特性があり、直接的に対象に関わって援助する、提供することが得意な人もいる。コーディネーターに向いている人は、家族を立体的に見渡す、俯瞰(ふかん)することが得意な人で、直接的に対象にかかわる人とは視野や視点が違う。

■プログラム4 全体会(分科会総括・ディスカッション)

【コーディネーター】 松田妙子さん NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事

【パネリスト】 野口比呂美さん NPO 法人やまがた育児サークルランド 代表

坂本純子さん NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事

奥山千鶴子さん NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長

松田さん まず、研修のまとめとして、地域子育て支援拠点のこれらについてキーワードをあげてください。

野口さん ○地域の課題は行政だけではまかないきれない。
(後の見守りがおろそかにならぬよう。)

- 実践=理論(実践を言葉で説明する力を持つ。)
- 予防的アプローチ(まさしくひろばの役割。)

奥山さん ○ひとつの事例が地域を変える(支えることのできる地域を作る。)

- 専門家へのプロセス(多様化する親・子・家族を包括的に見ていく。)
- 気づきから一歩前へ(心配なご家庭があるな、という気づき。)

坂本さん ○百足支援(チームビルディング。みんなの足を集めて歩く。)

- 着実な進化(地域から期待されるよう。分科会ですでに進化を感じた。)

松田さん ○地を這う(ひろばの力はこんな風に。)



[意見発表]

会場より

●「行政との課題はたくさんある。都市部と地方でも違いがあるが、各地域で話し合っていきたい。実践ありきで後から理論がついてくるということもあると思う。色々なケースがあり、それぞれのやり方も違う。それぞれの場所で頑張りたい。」

●「子育て支援コーディネーターになれるのか? 「地を這う」はひろばらしくて良い。全身全霊をかけてやっていくことは、おいそれとはできない。家族を総合的に見てやっていくつもり。

ひとつの例をとっても考え方や見る視点は様々。気づきの一歩から始まる着実な一歩を。」

松田さん 多様なスタンスでやっていくことが、課題解決のアプローチになったらよい。

坂本さん 今年地域子育て支援拠点研修事業は東京と大阪の2か所での開催となった。研修の機会を作ることは簡単ではない。子育て支援コーディネーター養成の研究など、皆様に提供できるよう、橋本先生と一緒に頑張ります。皆さんも実践者として自らレベルアップし、理論として形に出していき、行政にもぶつけていけるように、進化して行ってほしい。

奥山さん 子ども・子育て会議の委員の一人として、幼稚園、保育園、認定こども園の給付に関する判定、地域子育て支援拠点支援事業の充実について、3月までに決めなければなりません。(内閣府のHP参照。) 何もないところから制度は生まれない。実践が先にあって制度が追いかけてくる。目の前の親子のケースを丁寧にやっていくことが大事。今後の、拠点事業の再編について、コーディネーター養成に関しては責任をもって頑張っていきたい。

野口さん これから国の制度が変わって、市町村の制度が変わり、各地域の子育て支援のやり方が変わっていく。山形で、県、市の会議に参加しているが、親子の声を届けて地元の子育て支援を頑張っていく。東北は震災後の課題があり、建築物など物理的なものは復興していくが、心のケアは難しい。

松田さん 地域によって様々な事情はありますが、総力戦で、今日から一歩踏み出しましょう。「どうなるのか?」ではなくて、「こうありたい!」と願って。

